

# これが正論！ 日本の英語教育を正す

井上 貞明

## 1. はじめに

日本の英語学習熱は、中国・韓国同様、子どもから一般社会人まで燎原の火のごとく燃え上がりを見せている。しかしよく観察してみると、必ずしも効果的に英語教育が行われているとはいえない。一部では旧態依然とした教育が続いている。筆者は公立高校で28年間、大学で13年間という長い期間英語を教えてきた。それゆえ、この欠陥があちこちに顕在化しているのが目に留まる。本論ではその中のいくつかを俎上に挙げ、その解決策を探ることにする。

## 2. 高校英語履修は生徒の選択に任せよ

1958年、東京大学名誉教授であった臨床心理学者・故波多野完治博士が「日本にいながら英語の4つの技能、すなわち、聞く、話す、読む、書く技能を修得するには、IQが115以下では物にならない」という仮説を発表した。IQの平均値は100なので、115というのは割と高い数値である。これは差別教育につながるものである、と猛然と世論の反発を買った。しかしこの論を覆す有力な反論は、当時はなかった。

日本では英語や数学が得意な生徒に価値を置くが、そうでない生徒は蚊帳の外に置かれる。個性を重んずる教育とは、ひとりひとりの生徒の興味ある分野、得意な分野を伸ばす教育でなければならない。米マサチューセッツ工科大教授・利根川進氏(1987年生理学・医学部門でノーベル賞を受賞)は「日本では単純な価値観で生徒を評価しすぎている。人間の価値はいろいろな方面にあることを肝に銘じて、自分の好きなことを一生懸命することが大切である」と強調している。

しかしながら日本では依然として画一教育が、広く、深く根を張っている。幼児・児童をもつ若い母親が、バスに乗り遅れまいと競って英会話スクールにわが子を走らせている実態からも、このことが読み取れる。ウラル・アルタイ語族に属する日本語と

インド・ヨーロッパ語族に属する英語は、まったく異なった言語構造をもっており、従って中・高・大と進むにつれて、多くの若者が英語に挫折し、バスから振り落とされてしまう。日本におけるような英語環境の中で、ある一定のレベルまで英語を習得するには、倦むことのない勉学と強い意志力が要求されるのである。

ところが現実はどうか。もともと適性がない生徒に、これでもか、これでもかと、英語を叩き込もうとする。これは一見平等のようであるが、肉体的・精神的苦渋を味わうのは、結局学習者本人なのである。

第35代大統領ジョン・F・ケネディ政権時の駐日米大使であったエドウィン・O・ライシャワー氏は、このような日本の非効率的な英語教育を観察して、「This is a great waste of young national energy」と酷評した。

ある県立高校での調査によると、「英語が嫌い・苦手」という生徒が78パーセントもいるという。「実際、中学校で学習したはずの基本的な文法事項や語彙をきちんと習得できていない生徒が数多くいる。また、英語の学習方法がよくわからず、定期考査には丸暗記で臨み、考査が終わるとすっかり忘れてしまう、ということを繰り返している生徒が、数多く見受けられる」という。このような高校生の英語不適応症候群は、全国に蔓延しているのである。

大学における英語教育はどうか。全国に約650校を超える4年制大学があるが、少なく見積もっても、このうち約3分の1の大学の英語教育は、とっくに行き詰まっている。幼稚な英文も聞けない、話せない学生がキャンパスに溢れているのだ。

昭和50年代、平泉渉氏(当時自由民主党参議院議員)と渡部昇一氏(当時上智大学教授)との英語教育論争が、実用英語か教養英語かを論点の中心に据えて、大バトルに発展したことは、年配の英語教師であれ

ば多分ご存知であろう。この論争をまとめた『英語教育大論争』（文芸春秋社発行）の中で、平泉氏は、「高校においては、国民子弟のほぼ全員がそこに進学し、事実上義務教育化している現状にかんがみ、外国語教育を行う課程とそうでないものとを分離する」、すなわち高校英語を選択科目にすることを提案している。

このことは、斯界の権威者であり、東京外国語大学学長を務めた故小川芳男氏も、昭和53年、氏の著書『英語に生きる』（英潮社出版）の中で、すでに主張している。さらに、『閉ざされた言語・日本語の世界』などの優れた著書をもつ慶応大学名誉教授・鈴木孝夫氏も、『日本人はなぜ英語が出来ないか』（岩波書店）の中で、「英語の学習を教育のすべての段階で選択制にすることによって、学習者の総数を絞り、本当に英語のよくできる、今の日本が必要としている新しい指導者を養成する」ことの必然性を説いている。

若者の適性を無視した日本の英語教育に対し、3氏は警鐘を乱打したのである。

### 3. 発音指導軽視の実態

数年前日本英語コミュニケーション学会の年次大会が早稲田大学で開催された際、会長であった藤井章雄早大教授（当時）は冒頭の挨拶の中で、最近の学生は発音記号を知らないで困ったものである、と嘆いていたのを思い出す。早大生のような優秀な学生集団でもかたあきれてしまった。氏が学生に聞いてみると、高校の教師は黒板にカタカナで書いて教えたというのだ。

筆者は中学1年生時からNHKラジオの『基礎英語』講座で英語を学んだが、戦後間もない当時のテキストには各ページの下欄に新出の単語と一緒に発音記号が付記してあった。そのおかげで発音記号を自然に習得することができたが、最近のラジオ番組の『英会話』テキストを見てみると、単語には発音記号はついていない。

筆者が勤務していた大学の学生も例外ではない。これでは英和辞典を引いても単語の発音記号の発声法がわからないことになる。そこで筆者は高校教師のときに入手していた、数研出版株式会社の『英語の発音ノート』を利用して、1年生だけに発音指導をすることにした。この発音ノートは発音記号と一緒に

に、口の開け方を描いた絵が掲載されている。そして正確な発音はCDを使って教えるのである。これが学生に非常に好評を博した。毎回授業の前の10分位を利用して発音指導を行う。以下1人の女子学生の感想文を紹介する。

この授業では私は英語の発音の基礎知識をしっかりと身につけることができました。なんとといっても『英語の発音ノート』は、私を助けてくれました。

私の高校の時の先生は、英語の発音を教える時、カタカナを書いて教えたので、発音記号を見てもチンプンカンプンでした。それを先生は一から手を取って教えてくれました。お陰で今では英和辞典を引いても、発音記号が読めるようになった。先生にはとても感謝しています。

もう一例を紹介しよう。私は現在、拙宅の近くに住む私立の女子高校生（現3年生）を個人教授している。公立中学卒業直前の3月から教えてきたが、当初、この生徒の発音はまことにひどいものであった。例えば、coveredはコバード、lookedはルクッドといった調子であった。毎回10分ほど、『英語の発音ノート』で口の開け方などをよく見せ、CDで発音指導した。この生徒を教え始めてから、1年10か月が経過したころには、発音が非常にきれいになってきた。さらにうれしいことがある。この生徒が1年生末にクラス全員の前で教科書を読んだ際、担当の英語教師に「君は発音がとても上手だけど、留学したことがあるのですか」と聞かれたというのだ。本人はこのことを両親に報告し、私にも嬉々として知らせてくれた。あれほど苦手であった英語の力が徐々に向上していったのである。現在では、彼女は中学校の英語教師になることを切望している。教えている私もこんなにうれしいことはない。そして、去る11月末には国立大学である埼玉大学の教育学部に推薦合格したのである。

上記の高校は中堅の進学校であるが、この生徒に尋ねてみたところ、学校では発音指導はほとんど無視されているようであった。読みの練習はほとんどしないし、1つのレッスンの英文和訳が終わればすぐ次のレッスンへと進んでしまうようだ。大学進学指導が最重要課題であることはわかるが、発音指導

もしっかり行ってほしいものである。英語教育を取り囲んでいる環境が大きく変革している今日、バランスのとれた英語教授を実践してほしいと、切望する次第である。(いうまでもなく、立派な教師もいることは急いでつけ加えなければならない。)

#### 4. 英語教師研修の最低限の条件

今日でも英語教師の中には、力不足のために外国人恐怖症を患っている者が、少なからずいる。この慢性患者を治療するためには、根本的体質改善のメスを入れることが、わが国の英語教育界の急務である。このような教師はリスニングやスピーキングにまったくといってよいほど興味を示さない。英語指導助手であるネイティブスピーカーが来校しても、一言も英語で挨拶をしようとしなない。このような教師は、授業では英文を和訳し、文法の解説をする、それだけでよいという、一種の甘えのような感覚の中にいるのかもしれない。

財団法人・日本英語検定協会が高校約6200校の英語教師を対象に、平成7年4月にまとめた調査によると、高校教師の英語力評価は、「自信あり」は文法54.8%、読解45.3%、「自信なし」はリスニング44.5%、スピーキング55.0%という結果がでた。英語を教えることが職務であるのに、4つの分野とも自信がないのには、驚くほかはない。『話せない英語教師』(サイマル出版社)の著者・福田昇八氏は「全国的にみて英語を話せる人は、2割に達しない。ということは、8割の人は厳密に言えば英語教師としての資質に欠けるということである。日本の英語教師は、読み、書きができればつとまるのであり、ここにすべての問題の根源がある」と手厳しい指摘をしている。

折りしも文部科学省は全国の公立中・高の英語教師の実力向上を目指し、平成15年から5年間に6万人に研修を義務づけた。このことは、小さな第一歩の前進ではあるが、たった2週間程の研修である。しかも目標は英検準1級、TOEIC 730点、TOEFL 550点程度の英語力であるという。これはあくまでも「目標」であって、この目標に達しなくても何ら罰則はないのである。このような研修で英語力が向上するとは、とても思えない。

例えばリスニング力を考えてみよう。リスニングの力は一朝一夕に向上するものではないことは、この分野で少しでも努力している教師には、一番よく

わかっていることである。口について発せられる英語を、一瞬のうちに理解できるだけの力をつけるためには、教師自ら常日ごろ多量の英文を読み、またテレビ・ラジオ・CDなどを利用して、リスニングの訓練にほとんど毎日励まなくてはならない。英検でいえば、少なくとも準1級程度の力がなければ、リスニングの授業を受けもつことは無理である。

英検準1級の資格取得者は、中学教師で1割、高校教師で2割と言われている。これはやや情けない数字であろう。そこで英語教育界を少しでも改善するためには、今後の教師採用条件として、この目標達成を義務づけることを提案したい。あるいは採用時にこの条件を満たすことができなかった教師には、教壇に立って5年以内に、この英語力達成を強要する。

人間は競争原理が働かないと、一般的に容易に動こうとしないものである。英語教育界も例外ではない。英語の資格試験で高得点を取った者には、少なくとも給料の面で一時金でもよいから、特別手当を支給することである。さらにこのような教師は英語教育界の重要なポストに就けたりなどの優遇策を取り入れ、「上」から教育界を改革していく。こんなことは実業界では一昔前から実行していることである。友人の話によると、英検1級の資格取得後、給料が一挙に上昇し、会社の中でも出世頭になったという。筆者は高校教師時代の、今から23年前に英検1級に合格した。その当時受験料、参考書、交通費などを合計すれば約3万円は払ったが、全部自前である。特別手当、昇給など特典らしきものは何ら支給されなかった。

#### 5. 高校英文法の検定教科書を復活せよ

野口悠紀雄氏の著書『「超」勉強法』(講談社)がベストセラーとして登場したのは、まだ記憶に新しい。氏はこの本の中で「学校での勉強法は、英語を分解し、日本語と関連付けて学習しようとする方法である。私の考えでは、これが問題だ」と述べている。さらに氏は英語学習で「丸暗記」を提唱している。難しい文法のことは考えず、教科書を最初から丸暗記したという。丸暗記するのは実に簡単で、20回も繰り返し読めば、自然に覚えてしまう、こんなことはだれにでもできるというのだ。(自分にできるからだれにでもできるというのは、はなはだしい思い込み

である。心理学でいう投射というやつである)つまり文法不要論の立場を取っているのである。このような人は、論理的思考力が優れ、分析力に富む頭の切れる知識人によく見られる例外的人種である。

筆者が大学でリスニング教材を使っていた際、時々簡略に文法の解説をするが、これを喜ばない学生が必ずいる。特に英語の不得手な学生ほど、英文法の基礎を忘れていくことが多い。そこで最低限の文法のルールを黒板に書いて説明するのだが、学生にとってはそれが邪魔になるらしい。なぜ文法を軽視するのであろうか。恐らく中学・高校の英語教師が「英語を聞く、話す」には文法は不要であると説いたからではないかと思われる。そもそも英文法とは何か。I am a boy. You are a boy.を例にとると、Iにはam, Youにはareを用いること、これこそ文法というものなのだ。

平均的能力の学習者は、文法を基礎からしっかり教えずには、英語の構造は理解できない。筆者は公立高校教師を合計28年間も経験したので、このことは確信をもって言えるのだ。ではどうしたら文法力を「聞く、話す」力に結びつけることができるのか。最も肝要なことは、文法を知識レベルで止めてはいけないということである。特に初学者は身体が覚えるまで、反復練習する必要がある。Practice makes perfect.(習うより慣れろ)という英語の諺がある。それを実行するには、英語そのものが好きでなくてはだめだ。筆者は中・高時代から、NHKのラジオ英語番組に夢中になって聞き入ったものである。高2ごろまでには「聞く力、話す力」とも、日常英語レベル程度なら困らないほどまでに上達した。夢の中で米兵相手に英語でよく話したくらい、英語にほれこんだのだ。

大手予備校「代々木ゼミナール」の英語講師・鬼塚幹彦氏の話によると、「話せる英語」という御旗のもと、会話が重視されすぎて、学校では文法を教えるににくくなり、文法の基礎を身につけていない生徒が増えているという。氏も英語の習得には、文法の知識が不可欠であることを強調している。この文法をしっかりとマスターしていない若者が、アメリカなどに数年留学しても、日常会話はある程度までは上達

するが、文法的に正しい英語は話せないし、正しい英語も書くことができない。

世間では最近ようやく、文法を学ぶことは不可欠であるということがわかり始めたこととみえ、英文法書が店頭で並ぶようになった。リスニング用CD付き英語雑誌にも、「コミュニケーションのための英文法」などと銘打って、英文法を解説した用例が掲載されているのがよく目に留まる。

一昔前に英文法用検定教科書が教育現場から姿を消した。英文法学習はその学習のみに終止し、それが「聞く、話す」ための英語学習の足かせになっていると早合点したからである。要はその運用次第なのだ。筆者は高校生のころ、街の書店で文法、英文解釈、英作文などの参考書を購入して、これを徹底的に独学した。さらにラジオの「英会話」番組も絶えず聞き、同時に英会話の参考書も買って、基本的英文を繰り返し繰り返し音読して暗記した。また当時の駐留軍向け放送であるFENの子ども番組も、胸を踊らせて聞いたものである。このような学習を経て、英文法を身体が覚えてくれた。つまり文法を意識しないで、英語が使えるようになったのだ。英文法用検定教科書の復活を、筆者が叫ぶ所以である。

## 参考文献

- 井上貞明 (1998) 「日本の英語教育の停滞の現状とその改善策私案」『北海道教育の窓』12月号 北海道：北海道教育社
- 小川芳男 (1978) 『英語に生きる』東京：英潮社
- 鈴木孝夫 (2000) 『日本人はなぜ英語が出来ないか』東京：岩波書店
- 野口悠紀雄 (1995) 『「超」勉強法』東京：講談社
- 石原康代 (2004) 「「伝えたい」という気持ちを原動力に」『UNICORN JOURNAL』58号 東京：文英堂
- 平泉渉・渡部昇一 (1995) 『英語教育大論争』東京：文芸春秋社
- 福田昇八 (1979) 『話せない英語教師』東京：サイマル出版社

(元東京情報大学教授  
元英検1級面接委員)